

のでありますから實際全じ大さの像を網膜上に得ても、其が大さく思はるゝのであります、讀者は晴れ渡りたる夏の夕暮、親しき友垣と共に螢の飛びかふを眺めらるゝ折なぞに、試みに大空に輝ける任意の二つの星を定めて其間の距離幾何位に見ゆるやを諸共にあて、御覽なさい、或人は二尺位といひ或る人は一間位と云ひ、又或人は五間位に見ゆると言て、其歸結の甚區々なるを認めなさるでありませう。之れも各人の頭の中にある地球と星との距離の考へが（勿論漠然たるものですが）様々なるがため起ることで、又以て距離の考が目に見ゆる物の大さを知るに關係する所以を知るに足ります（完）

史傳



節女阿正の傳

米 溪

雪深うして梅蕾春に先だつを知り、時艱みて大節自から顯はる。和平文化の今に際して、此の凜冽の節義を説く、春風和煦の日に嚴霜を見るの感なきに非ざるべきも、世路の崎嶇決して今昔の差あるにわらず。まして人情の薄きこと、吉野紙の其より甚からんとするに當りては、又他山の石たらずんばわらざるなり。山陽背て筑の游あり、節女の事を聞て之を傳す。窓前の竹影風に揺らめく

所^{ところ}之^{これ}を緒^{ひもと}て感^{あは}な^かき能^{あた}はず、因^{よつ}て紹^{せう}介^{かい}すること、しぬ。

節^{せつ}女^{にょ}名^なは阿^あ正^{まさ}、其^{その}の父^{ちち}は七^{しち}兵^{べい}衛^{ゑい}と云^いひて筑^{ちく}前^{ぜん}博^{はく}多^たの^{ひと}人^{なり}なり。世^よ々^々農^{のう}を業^{げん}とし、傍^{たがひ}ら酒^{さけ}を醸^{じやう}して生^{せい}業^{げん}とし、資^し産^{さん}頗^{ひた}る豊^{ゆた}かなりしが、世^せ道^{だう}兎^と角^{かく}缺^{けつ}け易^{やす}く二^に妻^{さい}各^{ごと}一^{いつ}女^{にょ}を殘^{のこ}して先^まつ斃^{まか}りぬ。阿^あ正^{まさ}は其^{その}の後^ご妻^{さい}の出^いたり。七^{しち}兵^{べい}衛^{ゑい}も寄^よる年^{とし}波^{なみ}に、五^ご十^{じゅう}の時^{とき}家^{いえ}を其^{その}の外^{がい}甥^{てう}七^{しち}左^さ衛^{ゑい}門^{もん}に讓^{ゆづ}り、別^{べつ}に近^{きん}傍^{ぼう}に舍^やを營^{えい}みて其^{その}の老^{らう}を養^{やしな}ひしが、天^{てん}命^{めい}期^きあり、衰^{さい}老^{らう}病^{びやう}漸^{ぜん}く篤^{あつ}きに及^{およ}び、親^{しん}戚^{せき}誰^{たれ}彼^{かれ}を枕^{まくら}邊^へに聚^{あつ}め、後^{こう}事^じを囑^{たく}して曰^いく、吾^われに男^{なん}子^こなく、今^{いま}、命^{めい}旦^{たん}夕^{せき}に迫^{せま}る、心^{こころ}に掛^かるは彼^かの二^に女^{にょ}なり。公^{こう}等^{とう}を累^{かさね}はさんとするは之^{これ}、願^{ねが}はくは我^わか死^し後^ごに於^おて、正^{まさ}女^{にょ}の叔^{しやく}父^ふ嘉^か右^ゑ衛^{ゑい}門^{もん}を養^{やしな}ひて長^{ちやう}女^{にょ}を妻^{さい}はし、正^{まさ}は長^{ちやう}するを待^{まつ}て、長^{ちやう}二^に郎^{らう}に妻^{さい}はして、宗^{そう}家^かの緒^{むす}を承^つかしめんと、長^{ちやう}二^に郎^{らう}は七

左^さ衛^{ゑい}門^{もん}の子^こたり。

四十

斯^かくて、無^む常^{じやう}の風^{かぜ}は時^{とき}を撰^{えら}はず、幾^{いく}程^{ほど}もなく七^{しち}兵^{べい}衛^{ゑい}斃^せしかば、親^{しん}族^{ぞく}相^あ計^{けい}り、竟^{つい}に其^{その}の遺^い言^{ごん}の如^{ごと}くとく、長^{ちやう}女^{にょ}を以^もて嘉^か右^ゑ衛^{ゑい}門^{もん}に配^{はい}し、改^かめて阿^あ正^まを子^し育^{いく}せしめぬ、阿^あ正^ま天^{てん}資^し温^ん良^{りやう}にして、嘉^か右^ゑ衛^{ゑい}門^{もん}夫^ふ妻^{さい}に事^{こと}ふることに至^{いた}らざるなし。然^{しか}れとも嘉^か右^{ゑい}衛^{ゑい}門^{もん}元^{もと}來^{らい}無^む頼^{らい}の性^{せう}とて、少^{すこ}しも心^{こころ}を家^か事^じに用^{もち}ひず、日^ひに酒^{さけ}に親^{した}みて、同^{どう}氣^きの友^{とも}、村^{むら}の獸^{じゆう}醫^い萬^{まん}助^{すけ}と與^{とも}に沈^{ちん}酒^{しゆ}樂^{らく}みとなし、義^ぎ文^{ぶん}より受^うけし田^{でん}業^{げん}は概^{がい}ね、典^{てん}して幾^{いく}んど盡^つくるに至^{いた}りしかば、親^{しん}族^{ぞく}交^{かう}々^々之^{これ}を規^きすれとも、少^{すこ}も耳^{みみ}を傾^{かたむ}けざるなり。

斯^かくて過^すぎ行^ゆく年^{とし}月^{つき}に、阿^あ正^まも既^{すで}に成^{せい}長^{ちやう}するに、天^{てん}成^{せい}の才^{さい}容^{りやう}共^{とも}に備^{そな}はり、楚^そ々^々たる風^{ふう}姿^し人^{ひと}を動^{うご}かす。長^{ちやう}二^に郎^{らう}亦^{また}弱^{じやく}冠^{かん}に至^{いた}りしが、質^{しち}直^{ちち}にして勤^{きん}格^{かく}なれば、村^{むら}の人^{ひと}々^々皆^{みな}信^{しん}じ愛^{あい}しぬるに、浮^う世^せの風^{かぜ}は儘^{まま}な

らず、不幸にして連りに災患に遇ひ、資産稍前々の如くならざるに至りしかば、婚儀の談も因循に過ぎて、未だ成に至らざりき。

赤間の隣邑に勝浦村と云へるあり、其の村長は半五郎と云ひ、家甚だ富めるが上に當時の里正の事なれば、其の派振りも一方ならざるが、其の子源五郎の爲に婦を迎へんとするに、長短適はず徒らに過せるが、偶々阿正の才姿あるを聞くや、如何にもして、我が子の爲に之を獲んと欲し、私に機を伺へるに、會、萬助所用あり、勝浦に至りしかば、招て事の要を告げ、因て吾か意を通じたり、萬助之を聞くや、心中密に計りて謂へらく、苟も此の事に勾當し功を立て、因て此の翁の勢力を借るを得ば、今後、己れの欲する所成らざるなからんと。遂に約諾して歸り嘉右衛門を叩て情を

語るに、嘉右衛門も大に喜びて、親族にも謀らざるを許さんと欲せしも、親族の誰彼事の様を傳へ交々來りて、義父の舊約を捨て擅に己の、新利を規らんとするを責め、其の暴狀を請りしかば、流石、嘉右衛門も理の在る所之を如何ともする能はず。明日又萬助を召して故を語り、且つ謀て曰く、如何せば可なるべきかと、萬助亦窮す、因て其の兄道全を勸めて曰く、吾か兄、機才あり、事に臨みて謀るべしと。招き來し鼎坐す。道全策を盡して曰く、村長善次は彼の半五郎と同職に在りて固より親み善し、此の事を託して媒介となし、公然來り請はしめんには、恐らくは、彼輩も之を沮む能はざらんかと。嘉右衛門膝を拍て大に喜び、直ちに萬助を遣はし、潜かに善次の許に往きて、懇に意を授けしめしに、善次亦許諾せしかば、乃ち

相偕に携へ來り議を定む。

是に於て阿正を呼び、事の由を告げ、利害の在る所を説き、慰諭百方至らざるなし。正之を聞き默然として、良久しく答へざりしが、徐かに頭を擡げ、襟を正して曰く。諸君子の妾の爲に計り給ふ所、誠に徳とし荷はざるにあらざるも、父か歿するに臨み妾を召し、撫して長二郎に許されし。慈心屬する所、心肝に徹して忘るゝなし、敢て背くべきにあらざるなり。何事も、妾の能ふ所は唯命のまゝなるべきも、此の一事は獨從ふこと能はざるなりと。言ひ了りて潸然、涙、襟を濕はす道全等之を聞き、大に怒をなして曰く、吾か輩唯御身の爲に計るのみにあらず、事成れば、克く御身の義父を利用のみならず、施て吾が輩に至る迄、與に榮耀有らんとすればこそ、斯くも詞を

盡すなれ。此の洪福を捨て、落魄の長二郎を慕ふは、何の考ふる所あるかを知らざるも抑も顛倒の甚しき者にあらずやと。嘉右衛門亦頻りに罵て曰ふ、汝執拗、此の婚を肯せざるは、我れ其の故を知れり、意んに、已に密に長二郎と相通するに非ずや、不義者！我れ必ず汝等二人を放逐せずんば止まずと。

阿正涙を飲み頭を垂れて、終始敢て復一言を發せざるなり。(未完)

祇園梶子の話

上野紀士

梶子といふ女は、京都祇園の鳥居の南側なる水茶屋に、うまれましたものでありますから、祇園梶子といひます、家柄のいやしきには、思ひもよ